



西安碑林的拓本作り

知る者は言わず

多学少评(知る者は言わず、言う者は知らず)、この言葉は、学ぼうとする者がとるべき心構えであり、これを習ってほしい。実状を知らず関係する知識もなければ、まず虚心な態度で事に臨み、真面目に学び、決して早合点をし、軽率に口を滑らしてはならない。さもないと、失敗をしでかし、笑いものになり、大きな損失を蒙るのだ。これは、歴史学者が我々に残してくれた遺産で、学問を治め、事業を始める上で貴重な経験である。これを無視すれば、誰であろうときっと大きな痛手を受けることになる。

実際に自ら本を書くとか、何かを企画することは簡単ではない。懐手をして傍観する人は、あれこれ批評に、たいして手間はかからない。昔の人は一冊の本を書き上げるため、全身全霊を注ぎ込んでも満足しなかった。ところが、批判好きな面々は、好き勝手に作品をこきおろして、作者をがっかりさせる。明代に劉元郷が『賢奕編』の中で挙げた一例は、この問にたいする回答のヒントになるだろう。

その書によると、“劉壯輿は常に歐陽公五代史の訛誤(あやまり)を摘(あば)き、糾謬(きゅうみゆう)を為し、以て東坡に示す。東坡曰く、「往歳に歐陽公 此の書を著し初めて成る。王荆(けい)公 余に謂いて曰く。『歐陽公五代史を修し、而して三国志を修せず。非なり。子盍(なん)ぞ之を為さざる!』余固辞して敢て当らず。夫れ史を為すは、数十百年の事を網絡し、以て一書成る。其の間に豈能く小得失すること無からんや? 余敢えて荆公の托に当たらざる所以の者は、正に公の如く徒に其后を掇拾(てつしつ)されんことを畏るるなり。”この故事は明代の陳繼儒の『讀書鏡』の中にも、同じように記されている。しかも陳繼儒は感慨深げに述べている。“余之を師に聞きて云う、『未だ尽(ごとごと)く天下の書を読まず、敢て軽く古人を議せず。』然れども余謂う、『真に能く天下の書を読み尽くせば、益ます古人を軽く議するべからずを知る。』”



王安石

歐陽脩の『新五代史』は、薛居正の『旧五代史』に比べると、頁数はその半分程度であるが、独創的な内容が多い。これは誰も認めるところだろう。ところが、この書を批判するひが大変多いが、また作者を心服させる批判が少ないのも珍しい。これは何故か。まさか浅薄な学問が、論評好きの原因で、それで的外れの評論が多いということではないだろうな。

己を知り彼も知り、全てを知るといふ、学問に自信たっぷりの御仁は、批判相手の立場などもともと眼中にない。そのような人は、この世に自分の知らないことはないと思っているから、相手が進歩することなど全く思い至らないのである。そのために、批判の言葉で何か一つ躓けば大失敗を招くのだ。例えば、宋代の陆游の『老学庵筆記』の中で、王安石の対人批判は、相手方を軽視することにより、用語で失敗を犯した明らかな例を挙げている。

陆游はこのように述べている。“荆公素より沈文通を軽んじ、以って寡学と為す。故に之に詩を贈り曰く：『儵然として一榻 書に枕して卧し、直に日斜に到り馬に騎して帰る。』文通の墓志を作るに及び、遂に云う、『公雖(おもう)に書を読まず、或(あるひと)之を規(いさ)めて曰く、『渠(かれ)乃ち状元なり、この語過ち無きを得ん?』乃ち読書を改め視書と作(な)す。』又嘗て鄭毅夫の夢仙詩を見て曰く、『我に授るに碧簡書をもってす、奇篆丹砂に蟠る。之を讀むも識(し)るべからず、身を翻して紫霞に凌(の)れり。』大笑して曰く、『此の人字を識らず、自承するに勘えず。』毅夫曰く：『然らず! 吾乃ち太白の詩語を用いしなり。』”この文よりお分かりの通り、王安石は李太白の詩句とは知らず、軽率に他人を批評して、笑いものになった。人の評価は棺桶の蓋を閉じるまで決まらないが、彼は人を見下げたので、その前に評価を下した、ほんとに怪しからん奴だ!



陆游

王安石は宋代革新派の大政治家であった。胸に一杯の革新思想を抱いていたが、実務知識と事業経営の経験に欠けていた。宋代の張耒は『明道雜誌』で次のように述べている。「王荆公相と為り、大いに天下の水利を講ず。時に太湖を干す願(おも)い有るに至り、云わく良田数万頃を得るべし。人皆之を笑う。荆公因(ちなみ)に客と話(はなし)之に及び、時に劉貢父学士坐に在り、遽に対(こたえ)て曰く、『此れ為すこと易し。』荆公曰く、『何ぞや?』貢父曰く、『但し旁边に一太湖を開き水を納むれば則ち成るなり。』公大笑す。”王安石が政権にあった頃に、似た笑話が沢山のこっている。これは、王安石の思考が総じて非現実的であったことを、物語っている。特に、彼の態度には謙虚さが欠けていた。これが彼の大きな欠点と云えよう。

古人の経験から多くの道理を学することができる。その一つが、何でも多く学び、批判を控え目にして、謙虚な態度を失ってはならないことだ。ここで言う、多く、少なくは相対的であるから、絶対化しないで欲しい。我々は、如何なる時でもマルクス・レーニン主義理論を多く学び、大衆から、実践の過程に於いて謙虚に学ばなければならない。しかし錯誤や反動的問題には決然と挑まなければならない。この問題は今回の範囲を越えているので、別に取り上げよう。

しかし、我々が理解できない事情に直面すれば、真面目に自己の無知を認めなければならない。自己の誤りを発見したなら、自己の誤りを公表することを恐れてはならない。明代の陳繼儒の『見聞録』が一つの記事を紹介して、こう述べている。“徐文真浙中を督学す、有る秀才結題内に苦孔之卓語を用い、徐公批して云く、『杜撰なり。』後に散巻の時、秀才は前にゆき対へて曰く、『此の句、揚子雲法言上に出ず。』公即ち堂上に於いて応声して云く、『本より道(もう)すべし、不幸にして科第早く、未だ曾て書を得て読まざりきと。』遂に秀才に揖(拱手の礼)して云う、『承教了(ご教授ありがとうございます)。衆の情大いに服す。』果たして『揚子法言』の第一篇を開けると、『学行篇』が現れるが、最後まで読み進むと、『顔 孔の卓に苦しむ也』の一句に行きつく。この試験官がその場で過ちを認め、自己の面子を失わなかったのみならず、全ての受験生を納得させた。これは後輩へのよいお手本ではないか。

【語句解釈】

・授我碧简书，奇篆蟠丹砂。读之不可识，翻身凌紫霞——仙人が俺様に碧玉を砕いた粉で書いた竹筒を授けてくれた、古朴な篆書で書いてあり、丹砂にとぐろが巻いている様に見えた。竹筒の字を読んだが意味が解からずもたもたしていると、仙人はしびれを切らし、ぱっと紫霞に乗って飛び去り、夢がさめた。

奇篆蟠丹砂 →丹砂にとぐろが巻いている

記・北基行

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「多学少评」ひとそえ

「多学少评」この4文字の題名が文章の全体を示し、(知る者は言わず、言う者は知らず)という絶妙の日本語訳が骨格を形付けている。

「ひとそえ」は蛇足だと自覚していますと断った上で、贅語ばかりの埋め草をすることをお赦し願います。

袖手旁观，评长论短，总是不大费劲的：懐手して傍観する人は、あれこれ評語を並べるばかりで論に乏しいとしている。行動より口舌を得意とする人を戒めているのだろう。

王安石は宋代革新派の大政治家。他有许多革新的思想，但是缺少实际知识和办事的经验：王安石も残念な例えとして形無しであるが、鄧拓が同時代の誰のことを皮肉っているのか、言わずもがなだろう。

虚心地向群众学习：これは解釈と実行のどちらも難しいと考える。虚心と謙虚を比べてみると、謙虚は自らへりくだる姿勢の言葉であり、虚心は心をむなしくして受け入れ、無心に通じる精神的な状態を表す言葉だろう。虚心に群衆に学ぶことは容易では無いだろう。

「少学多评」の老生は、文末に「だろう」ばかりを配して、蛇足を引っ込めさせていただきます。

文・井上邦久

多学少评 原文

多学少评，这是值得提倡的正确的求知态度。我们对于任何事物，如果不了解它们的情况，缺乏具体知识，首先要抱虚心态度，认真学习，切不可冒冒失失，评长论短，以致发生错误，闹出笑话，或者造成损失。这也是我国历代学者留给我们的一条重要的治学和办事的经验。谁要是无视这条宝贵的经验，就一定会吃大亏。

一般说来，实际动手写一部书、做一件事等等，是相当不易的；而袖手旁观，评长论短，总是不大费劲的。比如，古人写一部书吧，往往尽一生的精力，还不能完全满意。却有一班喜欢挑剔的人，动辄加以讥评，使作者十分寒心。明代刘元卿的《贤奕编》中曾经举过一个例子，最足以说明这个问题了。

据说：“刘壮輿常摘欧阳公五代史之讹误，为纠缪，以示东坡。东坡曰：往岁欧阳公著此书初成，王荆公谓余曰：欧阳公修五代史，而不修三国志，非也；子盍为之！余固辞不敢当。夫为史者，网罗数十百年之事，以成一书，其间岂能无小得失？余所以不敢当荆公之托者，正畏如公之徒掇拾其后耳。”这个故事在明代陈继儒的《读书镜》中，有同样的记载。陈继儒并且感慨很深的说：“余闻之师云：未读尽天下书，不敢轻议古人。然余谓：真能读尽天下书，益知古人不可轻议。”

事实上，欧阳修的《新五代史》比薛居正的《旧五代史》，篇幅少了一半还不止，而内容却有许多独到之处。这是不可抹杀的。然而，历来挑剔是非的人多得很，而且有许多不能使被挑剔者心服，这是为什么呢？这难道不是因为有许多人学问不深而性好挑剔，评长论短而不中肯要的缘故吗？

尽管有的人自以为知己知彼，很有把握，对于自己的学问觉得满不错，对于被批评的人从来看不在眼里。但是，他可能还没有想到，自己毕竟不是无所不知的，而对方也不会是老不进步的。因此，他在批评中稍一冒失就发生了错误。比如，宋代陆游的《老学庵笔记》中，提到王安石对人的批评，常常因为轻视对方，出语冒失，就是明显的例子。

陆游写道：“荆公素轻沈文通，以为寡学，故赠之诗曰：儵然一榻枕书卧，直到日斜骑马归。及作文通墓志，遂云：公虽不尝读书。或规之曰：渠乃状元，此语得无过乎？乃改读书作视书。又尝见郑毅夫梦仙诗曰：授我碧简书，奇篆蟠丹砂；读之不可识，翻身凌紫霞。大笑曰：此人识字，不勘自承。毅夫曰：不然！吾乃用太白诗语也。”可见王安石自己并不熟识李太白的诗句，轻率地批评别人，就不免闹笑话。他看不起别人，竟至随便给别人乱作盖棺定论，真真岂有此理！

王安石是宋代革新派的大政治家。他有许多革新的思想，但是缺少实际知识和办事的经验。宋代张耒的《明道杂志》说：“王荆公为相，大讲天下水利。时至有愿干太湖，云可得良田数万顷。人皆笑之。荆公因与客话及之，时刘贡父学士在坐，遽对曰 此易为也。荆公曰 何也？贡父曰 但旁别开一太湖纳水则成矣。公大笑。”在王安石当政时期，类似这样的笑话还有不少。这些无非证明，王安石有许多想法是不切实际的。特别是他很不虚心，这一点可以说是他的大毛病。

我们从古人的经验中，必须懂得一个道理，这就是：对一切事物，要多学习，少批评，保持虚心态度。当然，这里所谓多和少，只是从相对意义上说，不应该把它绝对化起来。但是，对于我们说来，任何时候都应该更多地学习马列主义理论，并且虚心地向群众学习，在实践中学习。至于对错误的以及反动的东西必须进行坚决的斗争，那已经超出我们所说的问题的范围，又当别论了。

但是，我们如果遇到不懂的事情，总要老老实实承认自己无知；发现自己有错误，就不要怕公开承认自己的错误。明代陈继儒的《见闻录》说过一个故事：“徐文贞督学浙中，有秀才结题内用颇苦孔之卓语，徐公批云：杜撰。后散卷时，秀才前对曰：此句出扬子云法言上。公即于堂上应声云：本道不幸科第早，未曾得读书。遂揖秀才云：承教了。众情大服。”果然，打开《扬子法言》的第一篇，即《学行篇》，读到末了，就有“颇苦孔之卓也”的一句。这位督学当场认错，并没有丢了自己的面子，反而使众情大服，这不是后人很好的榜样吗？